

ミナミイワトビペンギンの赤ちゃん3羽、すくすく成長中

～DNA 検査の結果、人工受精による雛の誕生を確認、本種では世界初～

大阪市港区の海遊館では、平成 28 年 6 月 4 日から 6 日にかけて、ミナミイワトビペンギンの赤ちゃんが 3 羽誕生し、公開中の「フォークランド諸島」水槽で元気に成長しています。この赤ちゃんの DNA 検査を行った結果、1 羽が人工授精により誕生したことがわかりました。ミナミイワトビペンギンの人工授精の成功は、世界で初めてです。



海遊館では、ミナミイワトビペンギンの繁殖率向上を目的に、2011 年より繁殖生態の解明と人工繁殖技術の確立を目指し、神戸大学大学院農学研究科の楠 比呂志氏（准教授）と共同研究 に取り組んできました。研究開始から 6 年目の今シーズンは、飼育羽数が多く自然繁殖の実績を持つ葛西臨海水族園（東京）に協力を依頼し、4 月末に葛西臨海水族園のオスから精子を採取し、海遊館で飼育中の 3 羽のメスに人工授精を行いました。人工授精を行った 3 羽のメスは、4 月 28 日から 5 月 4 日にかけて計 5 つの卵を産み、ペアの親鳥が約 1 ヶ月間あたため、6 月 4 日から 6 日にかけて 3 羽の雛が誕生しました。

卵の殻の内側に付着した血液から DNA 検査を行った結果、3 羽のうち 1 羽が人工授精による雛の誕生であることが判りました。

海遊館では、今後、この人工繁殖技術を国内外の水族館や動物園に普及し、ペンギン類の繁殖を向上させるとともに、精子を凍結保存する技術を確立させて、絶滅の恐れがある野生下のミナミイワトビペンギンの種の保存にも貢献したいと考えています。

◆ミナミイワトビペンギンは、フォークランド諸島など南極周辺の島々に生息し、体長は約 50cm でペンギンのなかでも小型の種。岩場を飛び跳ねながら移動することからこの名前が付いた。目の上にある黄色い冠羽が特徴。沿岸の岩場の小石や雑草で巣を作り、メスは 1 回の繁殖で通常 2 個の卵を産む。ペンギンの中では気性がやや激しい。小魚やおキアミなどを食べる。IUCN（国際自然保護連合）が定めるレッドリストにて、絶滅危惧種に指定されている。